

毎月一日発行
発行所
宗像大社
福岡県宗像郡玄海町
電話 神渕 133 番
定価一年送料共 500円

神具・装束
結婚式場用品

福岡支社
本社

福岡市吉塚西林寺町
電話 九四〇五
京都市下京区油小路通六条北
電話 京都 三三七・九六六

株式会社 井筒

十月一日—五日
秋季大祭游

備はじまる



第八回 宗像大社献詠歌

毎月十五日 〆切 詠草到着順

福田 森 八藏 久留米 篠田太郎坊
三伏の風に青田も繁りけり五穀の
穂り神に祈りて
二十尋の底より如何なる魚あがる
かたゞ指先の糸に應つる

被いとも被えともいわれて
いる。

被いには自から罪穢れをは
らい落とそうとする自発的
な心構えをみる。
被えには被戸の神々の御力
によって清まろうとする他
力的な面を伺う事ができる
被いには清めが先行する。
身を清める事によって被い
が成立するのだ。



表千家家元奉仕
宗 像 献 茶 祭

諸々の悪を見ない、聞かない、言わない、物忌と称せられるのは、袂いと表裏一体をなすものとされる。季節の折り目折り目に、袂いを行ない、安らぎのひとつを設け、来し方行く末を静かに思う事が必要なのではないか。

本年度の餅祭を師匠兼家元奉仕職祭は来る十月五日（土曜日）に執行されることに決定した。当大社秋季祭が十月二日、三日に亘って進行され、一日後の五日に厭祭会となり、秋季大祭と連日賑々しく行なわれるものと思される。

献茶祭の参組
申込みについて

る。しかし、現在のとく、熊々遺跡地から参列される方々の参観施設が充分でないので、機軸諸施設が完成した後になるものと見てゐる。

この会では、各地方の同門の方々が弟を率いて、多く参加されるので、なるべく未加の方々に優先的に來て頂くという關係者は單で

尚、当日は熊祭の爲、約二時間交通安全の御祈願を中止するの願ひます。

本年熊祭式の参列について、大社に色々と御照会が、問合せがまゐりますが、この熊祭行事と前述の男表千家の御例行事とを関連してゐますので、茶席の発行、その他、興企画などの発行、その他の問合せは幸々同門会に御連絡下さいますよう御願ひ申し上げます。

なお、当大社事務局では、茶祭の発行が致しませうので御了すの願ひます。

大祭は先ず九月中旬沖津宮神
を大島中津宮まで奉遷申し上げ
申幸式より始まる。

拜観の方々に
秋季の海上神事形式は、西目本唯一殿の海上行であり、五本座の御船の船が進めばは雄壮そのものであり、年に一度の行事でありますか、神國をなすの旨は、月一日申、九時半頃に神楽海岸へ御出かけ、御参り下さい。

御鉄馬鑑、赤間から西鉄の御出で、時ハスが進んで、御参り下さい。

御利用下さい。

拝観の方々に

九月三十日 神中宮神樂を
お出で之の為、津宮神が神楽
電馬を、出御される。同日、神
を提する人々は軒並、国旗を掲げ、神
を提しての迎をする。午前十一
時の、この用意を奉祝する。みな
と祭が行なれる。夜になると
宵宮祭後各種の神樂行事、中宮は
夜遅くまで賑ひあそぶ。

翌一日午前中、中宮を出
御、御参り、神中宮は、島港に
結結して、御船の供奉御船の

海上神幸式 じんこうしき

拝観の方々に
秋季祭の海上神幸式は、西月
唯一最の海上行事であり、五
采雲の禰船の船団が進み祭は
社そのものであります。

年に一度の行事であり、まからん
観をなすの目標は十月、日午
時、正に神楽海岸へ御出かけ
願ひます。

国鉄東横駅、赤間駅から西渡
バスが運行されておりますので
利用下さい。

阿蒙少言

読みのものも聞かず、多すぎ
中絶する。たまに優美を求める
持が起つて、古い敵大の歌を
言葉の遊戯、表現のやき
、遂は技巧のたぐらべと
肉體批判の目が動く、気骨
疫時、庶民の中に去つた西行
魚つとになる。〇美しく造
、清めたる庭より、雑草
河原の風情が、野人の性分
合う。だが、長詩の歌を技巧
へたくらべと吐き捨て

あけがに草刈り要の草鎌を演じ き宵に吾が返り	名残 竹原 圓	と無言の刀背迫り来	陸厳守 真鍋 万三
若きを想ひ起て膝をたき語 らい辰まで同窓集い	津屋崎 丈野 時雄	豊かに袍に侍り	福岡 江崎 琴子
山緑河に緑ゆくところ岩の根黒く 稚魚魚け居り	田 熊 小野角次郎	思はせが今日の壽をわが止し ぬるをの神とれかな	勝 岡 木原 房子
反逆軍への教へを所辺に夏来る毎 の花散れて	田 熊 小野かをる	不在家族の現代なむ	大井 木原 房子
		茅の輪くさ姫が手にす包二つ	砂干してライフフラワー作らば
			夢笑ふに花をば

凛々しく我が前に立つ
村山田 吉

東に空を連る大蛇の山を見 えす霧のかげ	田 熊 鯨頭かつ代	吉 武 原田 松
眼つれはまゝかに顔の海の色 鐘嶺ひよき 潮鳴り	大 井 村山 幸生	吉 武 原田 松
(傷つたの胃根更けに たられぬの命がなすすから にねむれと孫の魂帰ふ)	香 椎 桜井 ツ子	田 島 白雲 山人
花裏の闇草匂ひほかなり 今宵の戀のみりに染む	戸 田 中ハツセ	田 島 楠本 正
いづの船海を渡り来るみわれ の縁はたがひ		

論説
バター臭の洗濯

歐米人の食生活に、栄養価と風味によつて好まれるバターは、今日世界的な食物となつてゐるが、わが日本でも例に洩れ日常大に用いられてゐる。終戦直後の農産物は、バターに配給に頗るゆづりかめ、学童は辻米菓を催し、主婦は石けんの用にいたる珍饈もつたが、今はその栄養価を知つて田舎でバターが買える。

食生活のバターは結構であるが、精神までバター臭くなつてゐるとすれば、心の栄養にはならぬ。むしろその臭気が、大和魂にまで滲透してゐるのなら、早く洗濯を、カビをおとす必要がある。

この美しい国士に民族の祖先が輝やかしいと共々伝えた和の心を大和魂と言ふたのなら、その大和魂に染つていた欧米の物質偏重風を改め、洗つ、清めねばならぬといふ。国政と誇るから洗つ、洗つてはなすまいといふ。に輸された頃の船、旗を打ったれ者は、でも三里でも、状況に応じて好きな方、非よかつた。婆さん、爺さん、ロ野郎の腹敗れしつ今日、駄場に置いた珍妙な風景笑ふそだが、事実そんなことが、当生であつた名士がスゴト昔談で語つてゐる。

うす言葉のない」とは、その金目や、その基底なき道義観がなかったことを意味する。無理な英語に当てて、拜外病にかかった日本人それが再読れる時、思想や日本語が製造され、似ても似つかぬ思想がバツクとなる。古くから血脈となつて伝承された東洋倫理、わが民族の道徳は、単に機械文明が牽連しただけの欧米の言語の誤訳によつて破壊される。本質喪失の被はまるとはよくないのである。

僅かに建國三百に足らぬ米国、豊富な資源と旺盛開拓心が、現代の繁栄をもたらしたの

今や世相の輪転機はつとに、またその与論機はつとに亂れて多種多様な報道道徳が強い。物質偏重の文化が「住みよい社会」物質豊かな米国國勢を誇つてゐる。暗殺犯は、その國面人が、若の黒人を辱

よけ社云一の建設
守革新の勢力大
うききたるの力
かつたと顧る見
長屋の榮達は迷
つては、ない。

現代世界の指導的
人種紛争、要人の
政治期間に亘て、白
色は歴史の栄相

まて飢えてゐるのか。
それは物語文化の混沌、砂塵が、花を散ら
根柢をつき穿ぬかも知れない。水中にあつて
このかきむき苦しむを説く縁の一節は、
文道の破壊を教える。押通を止じぬ、東洋は
の精神生活の極が、真剣を求めた理由であ
つづ。

対岸の火災と思つてはなまい、いちばんに
消えねばならぬ飛び火がある。洗、落さねば
ならぬ、タノミもある。その火消しと洗濯
は、現代を生くる吾人の切なる務め。

わが民族の耻が残りしと精神の醒醒は、な

た。○技巧に言へば、偽装を演 ずる鳥があつた。ひな鳥は危険 な鳥だつた時、外敵の注意をそら すため、自ら偽装を装つて羽ばた き、地上を飛ぶ。その間、	大井 安部 重郎	川つ速くはけるけ流れ行尽き なむあり大阿彌を見し	田鳥 中野 洋子
ひな鳥を逃がす知覚、親鳥の命 にかける愛情。○人間界には、自分 の心の弱のために、偽傷なると偽装 に愛憎が力強くもない。その症状 は愛憎が力強くもない。その症状 は愛憎が力強くもない。その症状	大井 安部 静子	すがすが朝のけを身うけ て朝顔の花はひさきゆく	田鳥 井上 託子
間、白々と見 聞、門 永島 哲夫	おれ映く泰山の花二雨晴 間、白々と見聞	道への霞き流れたへや安 心院 あじむの里は今昔も	大分 山田 幸雄
亭々松そびゆる照臨宮の裏のと こに鳴く喜楽を宛	門 永島 哲夫	夏夜の空を仰は夢の二祖父 の情を思ふ犀川	山田 山田 幸雄
久しに降りし雨の土に黒く しゆく見つけ心落付く	津島 占部 由久		

日本人の心を大和魂と言つ。剣を振りまわしたり、鉄砲を撃つたりする戦士意欲ではない。誤解は困るし、悪用も免。読んで字の如く、

原因はルール解釈の誤りにによる。解釈のは、スポーツだけでなく、多方面に亘つてした。野球のルールは訂正されたが、訂正

であつたが、もとは宗教的不満や獲物を狙う物質慾、それを廣りたてた冒險心から、米大陸を占有するに至つたアングロ・サクソン民族を中防衛者とが、反目斗争の機械力に物を言わせたが、白黒反目の再現と見

著と、徒手空拳の
を教えてくれている。
芳香を持っている。明治の先輩も「和魂洋才」
なのである。つま
みあげがたくな

素々として白くふけりけり木芙蓉
 山二つ谷ふちうにかくし螢た
 と夏空に立つ母校新校舎

香 椎 織田 橡雨
 東 郷 詠者 不明

(白 雲)

たづねた。

「河内では酋尾よくゐるに、成に会うたか。」

「はい。」

石馬介は返事をしなからうも主君の期待をぞぞぞ帰つて来たむしきでその色はさへなかつた。

「せつかく御折命をさけて参りましたが、すてがでが不調に終りました。尊氏はやはり、もすればいづひの希望もええ、失望と落胆の色をしきれなかつた。」

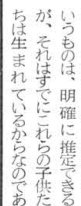
「私が使者をして、たつた処があつたから、御座ります。」

と石馬介はもてをさへて、くたせられた調に終つて、

(六十九)

の形成に進んでいくというところにカーブと、それからの推測については法則的なものが見出されてみた場合、これが社会的現象に

る寿命のカーブというものを考える場合、これが社会的現象に



は、どれだけのマ

るかは、はっきりわからないにしても、学校の設備、あるいは教科書などを考えている業者であれ

この間になると、いまの世帯主の女性の教師に相当する年齢層の女性が足りなくなつて、全部学校の教師

足のため、教育法についての機械化、あるいは合理化というものが考えられなければならない段階に

公家衆黒袍もあり、赤袍その外官位に応じ、色々の装束にての御供

色々の装束にての御供 井大宮司浦志摩守殿
に、ワラワ毛御供なり、板輿 と問合わせに行く

読書の秋、夜長の秋に一筋の隨筆
をものして編輯部までお寄せ下さ